

巻頭  
言

## 温暖化ビジネスに思う

会長 山崎 學



明けましておめでとうございます。2年続けてコロナ禍の中で時間が過ぎました。政権も安倍政権、菅政権、岸田政権と目まぐるしく変わりました。この原稿を書いている12月下旬現在でオミクロン株と思われる流行が世界中で始まり、日本でも第六波が襲来するのは時間の問題だと思っています。新型コロナウイルス感染症については季節性感染症に弱毒化していくという期待を込めた予想が主流を占めていますが、変異の仕方によっては当分感染の脅威から逃れられない気がします。こうした社会環境の中で日本精神科病院協会会員は一致団結して地域精神科医療を守っていきたいと思っています。今までにも増して会員諸先生のご指導とご協力をお願い申し上げます。

敬愛する高山正之先生は週刊新潮の「変見自在」(2021年10月28日号)の中で言う。

ネブラスカ出身のアンナ・ルイズ・ストロングはシカゴ大で共産主義に感化されてモスクワに移り住み、スターリンに気に入られて英字新聞を発行して共産主義万歳を唱え続ける。気分屋アンナは支那の毛沢東に興味に移り、重慶で周恩来と会い、丁重にもてなされて北京に移り住む。この年から始まった「大躍進」で3,000万人が餓死し、チベット侵攻で数万人の民が殺戮されても、アンナは事実を報道することはなかった。

アンナの甥のモーリスも叔母を通して支那の支配階級に深く入り込んだ。アンナが死んで2年後、モーリスは国連に入った支那の後押しで国連環境会議事務局長に就任し、支那と組んで「環境保護を口実に先進国の産業を弱体化させ環境で金儲けする」作戦を始める。きっかけはプリンストン大で発表された「放射収支理論」による。地球が計算上は零下17度になるはずなのに平均15度を保っているのは大気中にわずか0.03%含まれるCO<sub>2</sub>のおかげで、CO<sub>2</sub>が増加すれば温暖化は急速に進むと警鐘を鳴らした。ここで支那人とモーリスは多量のCO<sub>2</sub>を出す先進国が後進国から排出権を買う仕組みを国際的に作り、世界の3分の1を出す支那は後進国扱いにして適用から除外した。次にモーリスはアル・ゴアを仲間に入れて北極海のシロクマが死滅し、キリマンジャロの雪が消えると「不都合な真実」を映像化した。ノーベル財団はゴアにノーベル平和賞を授与している。すかさずモーリスと支那は「車はCO<sub>2</sub>を出さない電気自動車(EV)の時代だ」と吹きまくる。電気自動車に欠かせないレアメタルのネオジウムは内モンゴルで産出するし、充電用電気は支那製の太陽光パネルを使わせる算段をする。アル・ゴアの予言から大分経つが、シロクマの数はむしろ増え、キリマンジャロにも雪は降り続けている。みんなが首をひねりだした頃、モーリスは国連を舞台にした別件の詐欺で手配され、支那に逃げ込んで何も語らないまま鬼籍に入ってしまった。

我が国でも環境保護団体は原子力発電に反対し、自然エネルギーで消費電力を賄えと寝ぼけたことをほざいている。天候に左右される不安定な電力を基幹産業用に使えるはずがない。原子力発電が止まったままで化石燃料依存の発電で急場をしのいでいるが、化石燃料依存はCO<sub>2</sub>排出を増加させている矛盾について環境保護団体は答えてくれない。また10年が寿命といわれている大量の中国製太陽光パネルの廃棄処理についてどう考えるのかを教えてほしい。そもそもパリ協定の排出目標に排出量2%といわれている日本がなぜまじめに取り組まなければいけないのかがよく分からない。中国製太陽光パネルは原材料不足で大幅に値上がりし、電気の調達コストが大幅に上昇、化石燃料依存で国際価格が高騰し、ロシアではプーチン政権の政権基盤を揺るがしかねない事態にまで発展している。ウェスティングハウス社製の欠陥商品、東京電力の杜撰な運営、監督官庁のボカが重なり合って福島第一原子力発電所の事故につながったと考えているが、国家百年の計を考えると原子力発電を中心としたエネルギー政策をもう一度考える時が来ていると思う。